

文系学部から転向し、
行政保健師、スタートアップ企業を経て、国際医療協力局で活躍する保健師

ます あやこ 益 絢子

国際医療協力局
人材開発部・研修課
保健師



★略 歴

- 2004 立命館大学国際関係学部 卒業
(1年間休学し、バングラデシュにて日本語教師のインターンを経験)
卒業後は財団法人に就職、語学事業や国際協力に携わる
- 2006 東京都立大学 健康福祉学部看護学科 入学
看護師・保健師の資格取得
- 2011 東京都台東区入職 (台東保健所所属)
母子・地域・精神・保健事業から、高齢者の介護予防、感染症業務まで幅広く担当
- 2020 東京大学大学院 新領域創成科学研究科 国際協力学専攻 入学
大学院生活と並行して、墨田区保健所にて非常勤職員
(新型コロナウイルス感染症積極的疫学調査)
- 2022 生活習慣病予防事業をメインとしたスタートアップ企業に就職
健康管理やデータ分析事業担当
- 2023 国立国際医療研究センター国際医療協力局 入局

★現在の主な担当業務

- ・ SMEDO (現地ニーズを踏まえた海外向け医療機器開発支援) ※
- ・ JICA課題別研修「アフリカ仏語圏地域 女性と子どもの健康改善」
- ・ WHO西太平洋地域の低中所得国における医療従事者育成システムの強化に関する研究
- ・ グローバルヘルス・ベーシックコース：テーマ別オンデマンド、ライブ、アドバンスド研修

————— **益さんが、医療職・国際協力を目指したきっかけを教えてください。**

父の影響がとても大きかったと思います。父はNGOで働いており、主にパキスタンのスラム地域に学校を作る活動をしていました。なので、私が小学生の頃からパキスタン人が家に来たり、逆に在日外国人の家に招かれたりする機会がありました。でも、その多くが不法滞在・不法就労だったと記憶しています。大昔の話になりますが、まだテレホンカードが主流だった頃、薄暗い公園で違法テレホンカードを外国人が売っている姿をたびたび見かけることがあったと思います（地域差があると思いますのでご了承ください）。夕食に呼ばれた家では、件の違法テレホンカードをよく目にしました。

ある日、父が親しくしていたパキスタン人の一人が心筋梗塞で倒れ、救急車で運ばれたものの、なかなか受け入れ病院が見つからなかったことがありました。やっと入院できた病院でも術後3日くらいで強制退院となり、拳句に不法滞在がバレてしまい、退院後は強制帰国が決まりました。友人はまだ痛いと言っているし、自分の住んでいる地域には病院もない、医師もいないので再び発作が起きたらどうしようとずっと訴えていました。私はまだ中学生くらいでしたが、これまでふわっとしていた途上国の現実や無医村地域のリスクの大きさを実感した気がしました。その頃から漠然と医療職を意識し始めたと思います。

————— **国際医療協力局に入職する前はどのようなキャリアを積まれていたんですか。**

国際協力に携わる方が多くの職種を経験しているように、私もいくつかの職を経験しました。何となく医療職を目指しつつも、理系科目が苦手だったため、医療ではなく事務職系から途上国の公衆衛生にアプローチできれば良いかなと考えていました。大学では国際関係学を専攻しましたが、学問的な内容は正直おぼろげで、鮮明に覚えているのは長期間の休みごとにバックパック旅行したことやバングラデシュでの日本語教師のインターン生活です。



休みに入るとバックパックでアジア諸国を旅行



旅行中の地元食堂での食事、予算は1食50円



国際交流基金のインターンで、世界の日本語成績優秀者を対象にした訪日研修を担当。これを機に日本語教師に興味を持ち始める



大学を休学し、バングラデシュで日本語教師のインターンに従事

卒業後は、途上国支援を行っている財団法人に就職し、総合職として2年ほど勤務しましたが、やはり心のどこかで医療職への気持ちが残っていました。医師にも興味はありましたが、途上国の医療機関がない地域でも貢献できそうな保健師を目指すことに決めて、2度目の大学生活に踏み切りました。4年制大学の看護学科に入学しましたが、在学中に結婚や出産などのイベントがあり、家事・育児に加えて看護実習・国試・公務員試験が重なり、人生の中で最もハードな日々でした。

二度目の大学卒業後、まずは日本の保健行政について知識を深めようと思い、東京都台東区役所に保健師として入職しました。仕事に慣れてきたら、いつかは大学院に進学し、修士号を取れるといいなと漠然と考えていました。保健所の仕事は想像していたよりエキサイティングで、やりがいのあるものでした。最初は母子・精神・高齢保健を担当し、地域の町会や包括支援センターなどの会議に参加するなど地域づくりも経験しました。災害に弱い、いわゆる「木密地域（木造住宅密集地域）」の防災対策にも関わりました。

地域保健を数年担当した後は感染症業務へ異動となりましたが、Covid-19前は結核やHIV・エイズなどの感染症予防がメインでした。台東区は通称・山谷や吉原など感染症報告の多い地域があり、なんだかんだと常に疫学調査に出かけていた気がします。企業だけでなく、ドヤ街や風俗店などにも調査に入り、非常に刺激的な仕事でした。感染症対策での業務を通して、結核患者が日本人よりも低中所得国からの語学留学生や労働者であることを知りました。

また、海外で発生した感染症や罹患者数・死亡者数などの情報も頻繁に入ってくることにより、低中所得国での公衆衛生に貢献したいという気持ちが強くなりました。同時に、もう少し住民に対して根拠のある啓発活動をしたいとも思うようになりました。保健師活動の中で「何となくこの地域は冬になると感染症が流行る」とか、「この地域の高齢者は元気な気がする」という感覚的なものに頼ることも少なからずあり、データを取って裏付けできるといいなと日ごろから考えていました。そろそろ大学院進学も考えていた頃だったので、苦手な統計を含めて自分の知識の幅を広げられそうな大学院を探しました。ちょうどその頃、職場の回覧物の一つにNCGMの国際協力周年報があり、こういう形での国際保健もあるのだなと知りました。



保健所での啓発活動
毎年12月はHIV/エイズキャンペーンを実施

大学院は、公衆衛生学そのものよりも、医療にこだわらず多様に学びたいと考え、東京大学の新領域創成科学研究科国際協力学専攻に入学しました。選んだ専攻では低中所得国のインフラ開発や農業・灌漑設備を専門とする先生が多く、その一方で、開発協力とは何か？を問い続けるクリティカルシンキングを専門とする先生もいました。修士論文では社会的決定要因をテーマにし、データを集めながら定量・定性分析を行いました。

大学院卒業後は開発コンサルでコンサルタントとして働く予定でしたが、家族の事情で断念し、生活習慣病予防に取り組むスタートアップ企業に就職しました。感染症や母子保健ではなく生活習慣病を選んだのは、大学院での研究を通して、低中所得国の疾病構造が慢性疾患にシフトしているのを実感したからです。生活習慣病予防に対する日本の取り組みは、いつか低中所得国にも活用できるかもしれないと考えながら仕事をしています。

国際医療協力局に入職するきっかけ、理由はなんだったのですか。

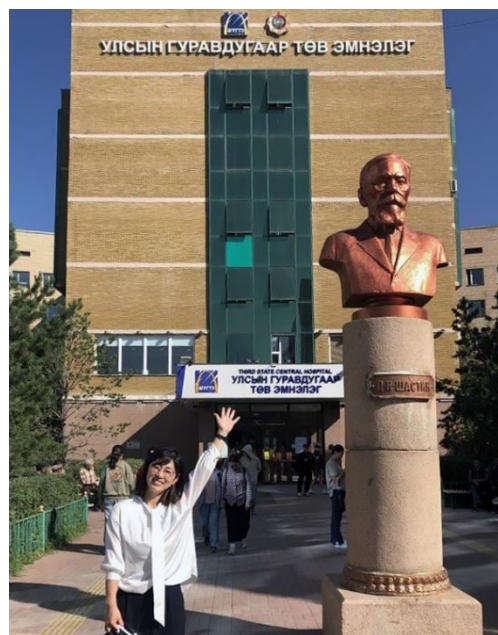
保健所勤務時代に国際医療協力局の年報を見てから、ずっと気になっていました。ただ、定期的な募集がなかったもので、いつか縁があれば良いなと思うようにしていました。大学院卒業後、スタートアップ企業で働いていた頃に突然(?)募集が出ましたが、当時仕事が忙しかったこと、局で働くには自分に自信がなかったためギリギリまで応募するか悩みました。提出締め切り直前まで決めかねていたところ、まだ出してないの!?!と夫に背中を押され、慌てて速達便で書類を送りました。

2023年4月に入局したばかりですが、海外からの訪日研修、モンゴルでの調査研究、インドネシアでの海外展開事業※など経験させてもらいました。どの事業もアプローチは異なり、新鮮かつ大きな学びとなりました。

※医療技術等国際展開推進事業：国立国際医療研究センター（NCGM）が2015年度（平成27年度）より厚生労働省予算で実施している事業。日本の医療制度に関する知見・経験の共有、高品質かつ相手国のニーズに応える日本の医療製品・医療技術の国際展開を推進しています。



ザンビア共和国の医療スタッフの訪日研修で富山の病院を視察



モンゴル国の国立第三病院前にて。
この後、看護部長さんへインタビュー

今後はどのような展望、夢をお持ちですか。

まずは苦手意識を無くすことを目標としています。好きな分野は寝る間を惜しんでも勉強しますが、苦手な分野はやっぱり躊躇してしまうのが正直なところ。でも何が起こるか分からない世界で、対応できる分野が多いのは自分のレジリエンスを高めることにつながっていると思っています。幸運なことに、国際医療協力局は多様な事業を展開しています。その利を生かして、今まで経験したことのない、苦手な分野に挑戦したいと思っています。そしていつか自分にしか出来ない専門性を身につけられるといいな、と考えています。

最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

私は遠回りをしてきたので、要領良く、まっすぐな道を選んでこなかった自分を何度も責めてきました。あの時間は無駄だったとか、間違えた選択をした、とか。でも最近になって、これまでの時間はすべて国際保健につながっていたのだと思えるようになりました。やっと、ぐるぐる回り道をしてきた自分を許せるようになった気がします。また、色々なところを寄り道したことで、得難い友人もたくさん出来ました。

国際医療協力に関わりたいと願いつつ、自分の将来がはっきりと見えず迷っている人もいると思います。でも無駄な時間なんて1秒もなく、必ず何かの力になっています。今を大切に、そして一生懸命過ごすことが目指す世界につながります。自分が選んだ道を信じて、いつか来る未来に備えて頑張ってください。



——— ありがとうございました。